

## 堀辰雄の杜甫訳詩について（承前）

長谷部 剛

一

堀辰雄（一九〇四—一九五三）には二種類の杜甫訳詩がある。『堀辰雄全集』第七卷（下）（筑摩書房、一九八〇年六月）に収録される「支那古詩（二）」と「杜甫訳詩」がそれである。後者「杜甫訳詩」が、中国古典詩歌のドイツ語訳である、Hans Betgeの *Physiobiten aus China*（一九二二）からの翻訳であることを、筆者は前稿「ドイツ語のなかの杜甫——堀辰雄の「杜甫訳詩」とのかかわりを中心に——」（『関西大学東西学術研究所紀要』第四十八輯、二〇一五年四月）において明らかにした。

本稿は前稿を承けて、堀辰雄の杜甫訳詩のうち前者「支那古詩（二）」について論じるものである。筑摩書房版『堀辰雄全集』では二種類の杜甫訳詩の呼称が異なり、後者を「杜甫訳詩」と称しているが、本稿では二種ともに「杜甫訳詩」として扱うこととする。前者——筑摩『全集』の「支那古詩（二）」——は十五首の杜

甫詩を口語体に翻訳したもので、未定稿のまま遺された未発表原稿である。これら十五首の杜甫訳詩は、一九八〇年の筑摩書房『堀辰雄全集』に収録されまえば、堀辰雄の多恵子夫人に堀の遺した自筆ノートおよび蔵書類の閲覧を許された内山知也氏が自筆ノートを判読して翻字し、さらに注解を加え、一九七二年十月に『堀辰雄 杜甫ノート』（本文篇と「解説」の二冊）として出版した。同書「解説」の「あとがき」は、以下のように述べる。

この「杜甫詩ノート」（未定稿）（引用者注、堀辰雄の二種類の杜甫訳詩のうち、筑摩『全集』に「支那古詩（二）」として収録されるもの）は、「支那古詩」と青鉛筆で自署した、26・5 cm×18 cmのザラ紙ノートに、鉛筆書きされた訳詩を中心とする。

「支那古詩」ノートは、十五首の杜甫の詩の訳文のほか、東西の人名書名など雑多なメモが書きこまれている。堀辰雄は、

あるいは杜甫以外の詩の訳も試みようとして、こういう標題をつけたのかもしれない。しかし他の詩人の訳詩が見当たらない以上、「支那古詩」という標題をもって本書の標題とするのに躊躇されたので、堀多恵子夫人に相談して、堀辰雄「杜甫詩ノオト」と題することになった。

さらに、同書の「あとがき」はこの杜甫訳詩の執筆時期について、以下のように述べる。

堀辰雄の中国文学に対する趣味は、昭和十五年ごろに至って急に強まり、中国詩文に関する読書を拡張し、やがて、十・八・九年に至って杜甫の詩の翻訳を試みるに至った。しかし、時勢の混乱と病のために、その完成発表の機会を失ってしまつたのである。(傍線、引用者)

堀辰雄は昭和十八・九年(一九四三―四四)に杜甫詩に取り組み前、森槐南『杜詩講義』を入手したようである。多恵子夫人は『堀辰雄「杜甫詩ノオト」』収録の「ひとこと」において以下のように述懐する。

十七年の夏、東京にいる私宛に軽井沢から、町の本屋で李白詩集の英訳を買ったこととか、福永武彦さんに『杜詩講義』

を買って送って貰うようにたのんだりしたことが書いてある手紙がある。「支那の詩もかうやって読み出すとなかなか愉しい。この夏の間は僕も一寸支那趣味を解するやうになるだろう」とある。

多恵子夫人の述懐にまず見える「李白詩集の英訳」とは、小畑薫良(一八八八―一九七一)の『李白詩集 英訳』(北星堂、一九三五年)であろう。堀辰雄文学記念館(長野県軽井沢町)の堀辰雄蔵書目録<sup>①</sup>にもこの書の名が見える。この書は、小畑が一九二六年にDoutより出版した、*The works of Li-po: The Chinese poet*の再版本である。次に見える『杜詩講義』とは、森槐南『杜詩講義』全三卷(文会堂、一九二二年二月十一月)を指す。堀辰雄蔵書目録にも『杜詩講義』の名が見えるので、堀が福永武彦に購入を依頼したこの書は実際に軽井沢の堀の手許に届いていたことがわかる(森槐南『杜詩講義』については後述)。

## 二

堀辰雄は「杜甫訳詩」(筑摩『全集』の「支那古詩(二)」)をなすにあたり、どのような杜甫詩のテキストを用いていたのであろうか。前述したとおり、堀辰雄の手許には森槐南『杜詩講義』があった。堀辰雄文学記念館の堀辰雄蔵書目録を見ると、さらに以下の二点を挙げるができる。

	書名	出版年	出版社	ページ数	大きさ (cm)	書き込み等
杜甫	杜詩錢注(杜工部詩集)	1935.12(S10)	世界書局	459	19	
楊西河編	杜詩鏡銓	1873.8(M6)	望三益齊鐫板	全10冊	34	書き込み

『杜詩錢注』は「清」錢謙益(一五八二—一六六四)が著した杜甫詩の注釈書であり、『錢注杜詩』とも言われる。初版は清・康熙六年(一六六七)に静思堂より刊刻された。堀辰雄所蔵のテキストは上海・世界書局の排印本(活字本)である。

『杜詩鏡銓』は、「清」楊倫(字は西河、一七四七—一八〇三)が著した杜甫詩の注釈書であり、初版は清・乾隆五十六年(二七九一)に江漢書院より刊刻された。堀辰雄所蔵のテキストは、清・同治十一年(一八七二)、呉棠が四川省成都で出版したもので、呉棠の書室の名が「望三益齋」であったことから「望三益齋本」と呼ばれる。周采泉『杜集書録』上(上海古籍出版社、一九八六年十二月)によると、「望三益齋本」は字が大きくて読みやすく、印刷・装幀なども第一級の良書であるという。

内山知也『堀辰雄 杜甫ノート』「解説」の冒頭では以下のように述べる。

堀辰雄の使用したテキストは、今のと

ころ明らかでない。蔵書に「錢注杜詩」「杜詩鏡銓」がある他、森槐南の「杜詩講義」など邦人の訳注書、および欧米文のアンソロジーがあり、それらを混用したと想像するばかりである。

内山氏は「堀辰雄の使用したテキストは、今のところ明らかでない」と述べるが、今回の調査で堀辰雄の「杜詩訳詩」(筑摩『全集』の「支那古詩(二)»)は基本的に森槐南の「杜詩講義」を参考に行っていること、場合によっては森槐南の『杜詩講義』の訳文をそのまま引き写していることが明らかとなった。

以下、まず森槐南の『杜詩講義』<sup>2)</sup>所載の杜甫詩原文を挙げ、続けて堀辰雄「杜詩訳詩」と森槐南『杜詩講義』を上下に对照させて、両者の対応関係を示す。ゴチック体の部分は、堀辰雄が森槐南『杜詩講義』の訳文をそのまま引き写した、あるいは森槐南の訳文を参考したと考えられる部分である。なお、堀辰雄「杜甫訳詩」中の「」は、訳文の行間に記された加筆・推敲の表現であり、これら加筆・推敲の表記方法は筑摩『全集』の「支那古詩(二)」のそれに従ったものである。

① 「野老」

野老籬前江岸廻。柴門不正逐江開。漁人網集澄潭下。估客船隨返照來。長路關心悲劍閣。片雲何意傍琴臺。王師未報收東郡。城闕秋生畫角哀。

堀辰雄「杜甫訳詩」〈全文〉 「野老」 わが草堂の籬の前には 浣花谿の流れが「變つて」「迂回して」 迂折してゐる その流れの儘に柴門が歪んだ形をし てゐる 漁人が「碧い潭」その流れの緩やかに なつた「向側の浪の静かなところで 網を垂れて」ゐる「魚を捕らえてゐる 估客の船が夕日を浴びながら遡つて 来るのへが√みえる よくまあ「こんな」長い路を経てこん な風景の險しいところまで來「て、自 分は住む氣になつ」たものだ 向うの琴臺「を」の方を眺めると一片 の雲がなんとなくそのあたりに立ち も去らずにゐる 「自分」丁度自分が此處に住んでゐる のもあんな雲みたいなものだ……	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉 此江の中には流の急なる所もありますし、又江の曲るに沿ふて迂折して行くのでありますから、 丁度門の形が歪んで居る處へ江の岸が亦迂曲つて居りますから、江の岸の迂曲つたに隨つて柴門が態を歪めてあるが如くに思はれるのであります。 又向側の浪の静かな處には漁人が網を垂れて魚を捕つて居る。
--	--

② 「南隣」

錦里先生烏角巾。園收茅粟未全貧。慣看賓客兒童喜。得食階除鳥雀馴。秋水纔添四五尺。野航恰受兩三人。白沙翠竹江邨暮。相送柴門月色新。

堀辰雄「杜甫訳詩」〈全文〉 「南隣」 錦里先生はいつも黒い頭巾をかぶつてゐられ「た」る隠士だ 聊かばかりの園に芋や粟をつくつて るて全くの貧乏ではない 自分がときをり訪ねてゆくと 子供たちは自分を迎へ「にもう馴染んで」「もう見知つて喜」んでゐる「ぶし、食物のこぼれを食べに縁先まで雀も馴「れて」たしく近寄つてくる さて私は歸らうとすると「先生がいつも川まで」「主人はそのまでといつて見送つてきてくれ」「る」た 秋のことだから水「嵩」がわづか四五	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉 是は山人でありまして頭に戴きました頭巾は黒の頭巾であります。 さう云ふ布衣の隠居先生であるけれども、併し此土地に聊かばかりの小園を拵へて其處に高臥致して居られることである。固より富貴の生計とは言はれないことであるが、併しながら一年の中に其園中の收入と云ふ物は別段ありませんけれども、茅といふ芋の類とか或は粟と云ふ様な自然の産物が有りまして、相應にその収入が有ることありますから、未だ全く貧とは言はれぬのである。 そこで遂ひ己が向ふを尋ねましても、向ふの家の子などは能く我面をば知つて居りますことであるから、能く御出でなされたと言つて子供まで喜んで居る事である。 階除に鳥であるとか雀であるとか申す物までが各々食を得て居ることありまするに依つて階除に近づいて來て馴れて居ると申します。即ち茅粟を以て一年中の收穫と致して居ることであるが、其茅粟などが時々零れて居ります。それをば食ひに階除の邊までも鳥雀が馴れて近寄つて來ると申します。 後の四句は南隣を出で、北の方の我家に
--	---

尺くらゐ「の深さ」しかない

あたかもその流れには「三人」位乗れる位の小さな船が「其處に」横はつてゐる「た

それ」に」こで、主人も私と共に乗つて「先生」わが家の方の岸まで送つてくれ「た」ようといふ……

舟から眺めると、白い砂、「緑」翠の竹、江村の夕「暮」景色、

あゝ、友ら、わが家の柴門には月「の」出るまで「の」光がさして「くる」「きた」くるのが見え出す……

歸ります所の有様を申し上げますのであります。

折節秋の事でありまして水量は段々減つて居りまして、其餘水纔かに四五尺までに添ふて居る。一体に水量は減じて居ることである。此添と云う字は一本に深くなつて居るのがあります。義の上から申すと深いとした方が宜い様でございます。

其野航は恰も兩三人位乗せることが出来る小さな船が横はつて居る。

主人が態々此船に乗つて我家の方の岸までも送つて来て呉られたことである。

白沙翠竹江邨暮と申しますのは後の段の骨子であつて、白沙翠竹江邨の暮に方つて秋水纔かに深さ四五尺の處を夜航の恰も兩三人を受くる物に乗つて、自身の柴門へ月色の新たなる時までには相送つたることであると斯う云ふ譯であります。

③ 「客至」

舍南舍北皆春水。但見群鷗日日來。花徑不曾緣客掃。蓬門今始爲君開。盤殮市遠無兼味。樽酒家貧只舊醅。肯與鄰翁相對飲。隔籬呼取盡餘盃。

堀辰雄「杜甫詠詩」(二) 全文

「客至」

春の頃になると、浣花谿には俄かに水が増してきて、我家の南も北も悉く、一ぱいに満ちてゐる

さうして日日鷗が澤山その水べに集つてくる……

が、ただそれだけだ——こんな春になつても他に訪ねてくれる客は無「い」ささうだから。

花の咲き乱れた徑も掃除もしてをら「ぬ。」なかつた。

ところが、君が「いま」けふ訪ねて下さつた、そこでわが蓬門をいま始めて開いた。……

もともと市に遠い片田舎だから午飯

森槐南「杜詩講義」摘録

春の頃になつて水量の増します時になりますと、浣花谿邊には俄かに水の増しても悉く一ぱいに満ちて居ります。

水が満ちて参りますと随つて水鳥などが澤山下りて参ることでありまして、日々羣鷗が舍南舍北に満ちて居る。

極く閑静な住居でありまして、平生ならば客の來る様な處でございませぬものであるから、其時分になると其春水の中に拍々として羽打ちをして居ります羣鷗の日々來るのを、我友の如くに思ふて迎へて居るより外、曾て尋ねて呉る人も無いのであります。それでありまして春が來て所謂花が開く頃でありますけれど、花の開いた徑をば別段客の爲に掃除するのと何のと云ふことは無いのであります。

所が今崔明府が御出で下さつたことであるから、實は此春に入つてより以來初めて我家の蓬門を今日、君の爲めに開いた様な譯であります。

元と々々斯う云ふ水に開まれて居る片田舎の事であつて、無兼味と云ふことは唯一品と云ふことであります。

を差し上げようにもこれ唯一品。  
 しかし家は貧しうござるが、「酒」舊  
 くから醸した酒だけはある、  
 それを御馳走しようとおもふがどう  
 だらう。ひとつ陪客に隣りの爺を呼  
 ぼうではないか。  
 なに、「ちよつ」と籬を隔てて、ちよ  
 つと聲をかければ、すぐ喜んで来て  
 くれるのだから……

客に對して御馳走とは到底出来ぬ事であるけれども、幸ひに家は貧ふござるが酒丈は拵へましたることである。そこで其舊くより醸しましたる酒がありますから、夫丈を以て先づ御馳走振を見せやうとして款待したることである。御客を款待する爲めには他に一つ陪客と云ふ者を呼んで参りまして、それと打群れて話を致しましたなら一層興味を添へる様なものであります。それには此隣に極く素朴な田舎親爺が居ります。籬を隔て、ちよいと聲を掛ければ、直ぐ隣の親爺は喜んで出て参ります。

④ 「落日」

落日在簾鉤。溪邊春事幽。芳菲綠岸圃。樵爨倚灘舟。啁雀爭枝墜。飛蟲滿院遊。濁醪誰造汝。一酌散千憂。

堀辰雄「杜甫詠詩」〈全文〉	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉
<p>「落」西日が簾の鉤の上を照らしゐるこの夕、——        ここ、浣花谿のほとりの春は、まことに幽邃だ。——        花々が岸に沿つて、いまを盛りと、咲いてゐる。</p>	<p>簾の鉤の上に落日が照らすと申しますから日も早や西に傾ひて落んとして居る晩方の景色、只さへも春の溪間の幽邃の場所で人の多く参りませぬ所であるのにそれが晩方であると申しますから一層幽邃なる様に見えることでありまして、丁度浣花溪といふ溪へ臨んで極く潤澤して居ります土地、その岸に沿つて花が咲いて居りますことである、今を盛りと芳菲爛漫として居りますその花圃からして向ふを見ますと向ふは溪邊で水の浅い所に一つの漁舟が繫つて居りますことで</p>

向うに一つの漁船が繫つてゐて、烟  
 「が」を立昇らせてゐる。  
 夕飯の支度に薪を焚いてゐるらしい。  
 わが堂前の木々には「簇らがつて枝を  
 争つて」木の實を争つて啄「んでゐる」  
 「みにくる」まうへとVして、枝から  
 墜ちるのもゐる。  
 だんだん日が暮れて「きて」くると、  
 蟲が庭ぢゆう「を」一ぱいに飛びまは  
 り出す……  
 さういふ景色に對しながら、私は晩  
 酌をして、  
 百憂を皆忘れてしまはう。  
 ほんとうに酒というものは誰が拵へ  
 たのか結構なものだ。……

ある、けれども丁度落日の頃のことであるからいたして漁舟の中に居る漁夫共が夕飯の支度を致すものと見へて今船の蓬よりいたして薪を焚きます所の烟が立昇つて居ります、  
 我堂前に樹木或は竹などは植はつて居ります所へ頼に雀がやつて参りまして此雀が木の上に出来たところの木實をば啄つて居る、その雀が澤山居りますことでもありますから枝を争つて木の實を取らうとしたして居りますからついで其爲に鳥が下に落ちるなど、いふこともあるのである、それから又段々日が暮れて参りますと妙な蜂蟻が此軒の所へ参りまして頼に上下して飛廻ることでありまして頼を飛蟲滿院遊と申しましたのでありまして矢張り日暮の景色に外ならぬ、即ち何れも幽邃一段の趣をば増す想があることである。  
 只でさへ面白いのでありますが此景色を眼に見てさうして晩酌の酒を取りますといふと非常に面白いので百事皆忘れて仕舞ふという様な心地がある、是は即ち溪邊の幽事でありませぬがそれを見て興の在るところを述べたので一體酒といふ物は誰が初め拵へた物かは知らぬけれども實に結構な物で此様な景色を見て酒を手にとつて居る時に當つては如何なる憂があるかと雖も我心に集まつて仕舞ふことでは無くて皆其憂が散じて仕舞ふことである實に酒の徳といふものは結構なものであると斯く申す意味合であります。



⑤ 「江亭」

坦腹江亭暖。長吟野望時。水流心不競。雲在意俱遲。寂寂春將晚。欣欣物自私。故林歸未得。排悶強裁詩。

堀辰雄「杜甫詠詩」〈全文〉	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉
<p>「江亭」</p> <p>或日、私は江亭の暖かなところに「来て」横はりながら、</p> <p>氣儘に江水の流れを見下ろしてゐた。水は疾く流れてゐたが、私の心はいかにも長閑でそれを競ふ心は起らない。</p> <p>「雲は」さうして雲が空中に漂つてゐて動かうともせずにあるが、私の心もその雲のやうだ……</p> <p>もの靜かに春の一日も暮れようとしてゐる、</p> <p>そしてすべてのものが、各々「自」その所を得て、自ら満足してゐる。</p> <p>ただ、流浪中の自分だけは、かかる</p>	<p>江亭の暖かな所に参りまして己が腹を出して坦腹をいたして一日氣の儘にいたして悠然と江涯の景色を望みますと實に好い景色である、其景色に對して覺えず長吟を試みざるを得ぬ様になりましたことである。</p> <p>其景色を申し上げますと江水の滔々として流れるに拘らず己の心に一向求むるところがありませぬから水と流を競ふといふ心は起らないのであります、水の流れば疾いが之を見る者の心は甚だ長閑であります。</p> <p>それから空中には如何にも迫らずに悠然として雲が動いて居りますからそこで滯つて居つて一向動かない様に見へます事である、その動かないのと同様雲の脚が如何にも遅くあると云ふのは我が心が動かぬと云ふのであります</p> <p>寂々春將暁。欣欣物自私。此欣々の一句はどんな物でも草でも木でも花でも鳥でも各々其處を得て各々自ら満足したして居りますから申したので此後の詩に花柳更無私といふ句がありますが、言葉は反對でありますけれども其意味は一つ事であり、</p> <p>さういふ譯で江亭を見ます物は何一つとして其處を得ざるは無いのであるが、獨り所を得ぬ者がある、それは他でも無い此杜子美であつて此外國のやうな遠い</p>

<p>「好い」景色を見ても、「所を得てをらぬ」ひとり悶々としてゐる。</p> <p>「ひさしく故郷に歸ることができぬので」さうしてその悶を遣るために、こんな詩を書いてゐるのだ。――</p>	<p>他國に流浪いたしてさうして久しく故郷に歸ることが出来ぬといふのである、此一點のみは物各自ら私しを欣々然たるにも拘らず、それとは反對の次第であるそこで故林歸未得といふ感が浮かんで参りますと折角好い景色を見て面白かつたのが俄かに故郷を思ふの情を生じて参つた此郷愁を遣り悶を排するが爲めに此一詩を裁した譯である</p>
--	---

⑥ 「柵樹為風雨所拔歎」

倚江柵樹草堂前。故老相傳二百年。誅茅卜居總爲此。五月髣髴聞寒蟬。東南飄風動地至。江翻石走流雲氣。幹排雷雨猶力爭。根斷泉源豈天意。滄波老樹性所愛。浦上童童一青蓋。野客頻留懼雪霜。行人不過聽竿籟。虎倒龍顛委榛棘。淚痕血點垂胸臆。我有新詩何處吟。草堂自此無顏色。

堀辰雄「杜甫詠詩」〈全文〉	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉
<p>「柵樹爲風雨所拔歎」(永泰元年三月) 流れに沿ふて、</p> <p>一本の楠の木が、丁度わが草堂の前に、立つてゐる。</p> <p>故老によると、二百年も経つといふ、珍しい大木だ。</p> <p>私が此處に居を卜したのは、全くこの老木があつたためだ。</p>	<p>此流に沿ふて、一の楠が生えて居るのが、丁度、我が草堂の前に立つて居つたのであります。</p> <p>此樹は非常に大なる樹であつて、殊に</p>

<p>夏、この木陰にゐると、涼しくつて、まるで寒蟬でもきいてゐるやうな氣もちにな「る。」つたものだ。 偶、東南から恐ろしい風が吹いてきて、 江水を翻弄したり、水中の石を走らせたり、 天上の雲氣が「ここ」に籠つて「まで下りて水と共に荒れ」る「狂ふかとおもはれた。」 そのをり、此老木は、 その恐ろしい雷雨にどこまでも抵抗をつつけてゐたが、 遂に根こそぎ倒れてしまった。…… 私は、この「江のほとりの」流れに沿つてゐた老木をいかに心から愛してゐたことだらう。 私は自分の草堂から見ると、あたかもその「重」青い蓋のやうに「重」亭々と見える大木を。 しかしその梢を愛するのは、私ばかりではないと見え、客などもその木を「雪霜にあてない」大事になさいといつていく、 又、ときどき旅人らしいものが、そ</p>	<p>夏、此の木陰に参りますと、非常に涼しい。 五月は、暑い自分ではありますが、此樹の上に鳴く蟬は、寒蟬であるかと思ふ位、如何にも涼しく、夏を忘れる。 偶、東南より致しまして、恐ろしい風が参りまして、地を動かして、此處に吹付けて來ましたが故に、江水も其風の爲めに吹き翻されて、水の中の石までが打揚げられることになつて、隨つて天上の雲氣も、此處に籠つて、江水と共に流れるといふことになつた。 恐ろしい雷雨が吹付けて参るのをば、此幹で尚ほ排いて、雷雨の力に對して、何處迄も抵抗して居た様子であつたけれど、風の方の力が強く、遂に根こそぎ倒れて仕舞つたことである。</p> <p>野客などが立留つて、之を見ながら賞めて呉れる。同時に、余りに雪霜などに觸れないように御用心をなすつて、保護なさいといつて、注意して呉れる。</p> <p>又た其處を旅行して來る人などが、此樹の下に参ると云ふと、立去る能はずして、頻りに耳を傾けて、其梢樹に風が吹</p>
---	--

<p>の樹の下でその風「音を」になる響に耳をすましながら、立ち去りがてにしてゐることもあつた。…… それほどの樹だのに、——龍のやうな「大木」立派な樹だつたのに、いま、倒れて、荆棘に委ねられてしまつてゐる。…… 私はもうこれから詩をつくつても、あの木の「下」傍がなくば、どこでそれを吟じよう。…… あの木の風に鳴く響きと相應して、私の詩は、おのづから生氣があつたのだのに……</p>	<p>付けて、竿籜の如き響きを發しますのを聞いて居られる。 それ程に、野客や行人までが、頻りに愛して居つたもので、虎の如く龍の如き大樹であつたけれど、今、倒頓致して、荆棘に委ねて仕舞つた時には、何とも致方のないことである。 自分が詩を作つて、其詩の吟聲と、此樹の風に鳴る響きと相應して、非常に顔色を生じて居つたのであつたが、今は詩を吟ずることばかりで、再び竿籜の如き面白き響きを聞かうと思つても、聞くことは出來ぬ訳であるから、草堂は此より顔色なしとなつて仕舞つたのである。</p>
---	--

⑦ 「茅屋為秋風所破歌」  
八月秋高風怒號。卷我屋上三重茅。茅飛度江灑江郊。高者掛胃長林梢。下者飄轉沈塘坳。南村群童欺我老無力。忍能對面爲盜賊。公然抱茅入竹去。臂焦口燥呼不得。歸來倚杖自歎息。俄頃風定雲墨色。秋天漠漠向昏黑。布衾多年冷似鐵。驕兒惡臥踏裏裂。牀頭屋漏無乾處。雨腳如麻未斷絕。自經喪亂少睡眠。長夜露濕何由徹。安得廣廈千萬間。大庇天下寒士俱歡顏。風雨不動安如山。嗚呼。何時眼前突兀見此屋。吾廬獨破受凍死亦足。



堀辰雄「杜甫訳詩」(全文)	<p>「茅屋秋風の爲に破らるるの歌」 八月、秋風が「荒れ狂」吹きまくつて、わが家の茅屋根はことごとく持つて行かれてしまつた、 さうしてその茅は川向この村へ落ちた。 その一部は林の梢に突つか、「り」つたり、 また塘の窪いところに沈んだりしながら…… するとその村の悪戯小僧どもが、その茅を私の「目」見てゐる前で盗んで、 みんな竹陰のなかに去つていつた…… 私はこちらから大聲をあげて、口が乾くまで、怒鳴つてみたが、もう間に合わず 已むを得ず、杖を曳いて、自ら歎息して、歸つてきた。…… やがて風は止んだが、俄に「風が」眞黒「」になつて、「な雲が出てきて、秋の空が、「日」暮れながら、一面に掻き曇つてきた。 やれやれ、こんどは雨か。――</p>
森槐南「杜詩講義」(摘録)	<p>八月の秋風が怒号致して、其大風の爲めに、トウトウ我家の屋根は悉く吹捲られて、持つて行かれて仕舞つた。 其處に散亂致したので、高いのは長林の梢に突つ掛かり、下の方のものは、塘の窪い處に落ちて、水に沈んで居る。 ところが、向岸の南村には、悪戯小僧が澤山居つて、 已むことを得ず、杖を曳いて自ら歎息して、歸つて来たことであつた。 然るに其風が全く止んで仕舞うと、俄に空は墨を流したやうに眞黒になつて、秋の空が、日が將に暮れんとして居るに際して、空一面に掻き曇つて参りました。</p>

わが家の蒲團がもう多年用いているので、鐵よりも冷かだ。	<p>その上、子どもたちは、寢様が悪いので、すつかり破れてしまつてゐる。そこでもつてきて、「こんどは」の雨だ。 あばら家だから、方々雨「が」もれがして、ぐつしより濡れてしまつてゐる。 夜どほし「降りつづけ、」雨がふりつづけて、眠ることも出来ない。 あ、兵亂以來、不眠がちな私は、この上、こんな有様では、此夜をどうして明かすことができようか。 こんな窮境にあつて、自分の考へることは、 なんとかして大きな建物を拵へて、その中に天下の寒士を集めて、どんな風雨にも動ぜずにゐられるやうにし「」やりたい、といふことだ。 嗚呼、そんな大きな家を突兀として自分の目前に見ることができたら、我輩の家などは、偶、秋風に破られて、自分が凍死したとしても構はないのだが……</p>
多年唯だ一つの蒲團を用ゐた爲に、其蒲團は鐵よりも冷かである。	<p>此夜をどうして明かすことが出来ませうか。 自分は斯う云ふ窮境に陥つて居て、仕方がないのであるが、天下の爲めに、廣廈千萬間と云ふ、恐しい大建物を拵えて、其中に天下の寒士、即ち貧窮で苦しんで居る奴を、悉く集めて さうして少しも雨の憂もなく、皆な喜んで居る顔をして、居ることが出来たらば、廣廈の下であるから、どんな風雨が來やうが、恐ろしいことはない。 今日、眼前に突兀として、さう云ふ大きな家を見ることは出来やう譯はないが、併し何とかして、突兀たる大きな屋を見ることが出来るならば、我輩の家などは、偶、秋風に破られて、自分が遂に凍死に死んで仕舞つたとて、少しも厭はない。</p>

⑧ 「秋興八首」其一

玉露凋傷楓樹林。巫山巫峽氣蕭森。江間波浪兼天湧。寒上風雲接  
地陰。叢菊兩開他日淚。孤舟一繫故園心。寒衣處處催刀尺。白帝  
城高急暮砧。

堀辰雄「杜甫訳詩」〈全文〉	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉
<p>「秋興八首」大暦元年（五十五、六） 夔州にて、 I ここ巫山、巫峽、——「秋興」蕭「寥」々たる氣が「深く」一面にしみ渡り、ありとある楓の林が露のためにすつかり痛めつけられてゐる。——あゝ、秋が深い。 「江の浪は」すべて陰「森」々として、江の波は涌いて天と連なつて「湧いてゆき」あると見え、 また天から風雲が垂れて、地に接してゐるやうに見える。 この土地に来てから、再び菊の「咲」花の咲くのを見「て」去年の涙を「再び」新たに「する」。 流浪の身の私ははやく故園に歸りた</p>	<p>玉露凋傷楓樹林、巫山巫峽氣蕭森。三峽の土地に生えて居る楓樹を持つて参りまして、秋も段々暮れて参りますことであるから、露が置きまして其露に痛められて次第に楓の色を増して参る事でありませう。それで玉露の氣の爲に楓樹林が痛められます譯であります。夫が一度ばかりで無くつと巫山巫峽見渡す限りの楓樹林が悉く凋傷された譯でありますから、益々秋の氣の蕭森たる所が浸み渡り秋悲を感じます譯であります。 秋の頃で水量が増して参りましたものと見えまして其江中の波浪は天を兼ねて湧く様に思われる。即ち波が天に連つて居る様に思われる。 上から垂れる風雲が地に接し其處へ持つて参つて下で湧きます波は天に連ると云ふ譯でありますから、唯是、陰霾と陰り籠る有様であると云ふ義であります。 昨年の秋菊の開く頃に此土地に来て今年又菊が再び開くと云ふのであります。それで今日より致して茲に流落を悲しんで居るものであるから、去年菊を見て瀧いだ涙、それが又今年も同じく菊を見て同じ涙を瀧ぐと云ふのである。</p>

いとおもつて、舟を買つてはあるが、それも空しく繫いであるきりだ。冬も近づいてきてゐるので、處々の家では寒さの用意に「着物」衣を拵えてゐるとみえ、  
孤城のあたりからは日暮になると砧の音が忙しさうに聞こえてくる。

身は船に乗つたけれども其船を「たび夔州」に繫いで船中に於て遙かに我が故園を思ふ處の感を生じた事であると申します。早や秋の末のことでありませうから諸處の家で寒さの用意にとて着物を拵へる。即ち刀尺を催して居ることである。其證據には此白帝城の高い處より致して日暮になると砧の聲が聞えることである。其砧の聲を聞くに付けても寒さを防ぎ着物の用意に忙しうことが分るのである。

⑨ 「秋興八首」其二

夔府孤城落日斜。每依北斗望京華。聽猿實下三聲淚。奉使虛隨八月槎。畫省香爐違伏枕。山樓粉堞隱悲笳。請看石上藤蘿月。已映洲前蘆荻花。

堀辰雄「杜甫訳詩」〈全文〉	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉
<p>II 孤城にはいま落日が斜めにあたつてゐる。 いよいよ日が暮れて、空に北斗星が見え出すと、私はその下のはうに都を思「ひ」ふ。 さうしてゐるうちに、猿の聲が聞えて「きて」、私は覺えず涙を催す。</p>	<p>夔府孤城落日斜。今は日が晩れて將に落日斜めならんとする時である。 其際第一に眼に附きますのは空の上所謂北斗星が次ぎ次ぎと見えて参りました。其北斗星の在る處は我都であると思われからそれ其北斗に當つて都があります。猿が三聲まで悲哀の聲を發して啼きます其聲を聞けば、聞く者は至つて感に堪へずして覺えず涙を催すことである。 此奉使虛隨八月槎と云ふことは色々解釋がありませうけれども、是は嚴武の事を申したものであると云ふ説が一番正しいのであります。嚴武は唐の節度使であります。夫で張翥が漢の天子に事へて居</p>

私「は」が「嚴」頼んでそれに随つてきた人は、「いま去つて此處にあらず」死んでしまい、自分ひとり此處に空しく残されてゐる。

本来ならば自分は都にあつて、「晝省の香爐に」天子のお傍近くに仕えてゐる身であるのに、

かうして遠く蜀へ流浪し、徒らに病に臥し「てゐる。」ながら、「そこから遠ざかつてゐる——」。

山樓に「身をよせて、」あつて、物悲しい筋の聲を聞いてゐるほかはない」のだ。

いま、日が暮れたかとおもふと、見よ、もう石の上に這つてゐる葛蘿には月「の光が」かがさし「てゐる。」さうして遠く、かなたの洲の蘆荻の花「はもう」はすでにすつかり、月の光のなかにある。

と云ふこと、嚴武が唐代の節度使になつたと云ふことを假りて此詩に持つて参りましたのであります。どうか嚴武に従つたならば責めて自分の目的も段々遂げることが出来るであらうと思つて嚴武に依つた。所が豈圖らんや其嚴武は途中より朝廷に召還された事であるから、我は虚しく八月の嵯に随つたものと言はなければならぬ。嚴武が此土地に臨まれたので我も其嚴武を頼んで之に随つたのである。

嚴武が折角取立て、呉れたかと思ふ間も無く死んで仕舞つて、自分は又誰に依つて都へ歸ると云ふ旅費も無い譯であります。それで役人にはなつたが晝省の香爐に再び接近する機會を失つた。それから後とはとうとう此枕に伏して舟に臥して此夔州あたりへ流れて來る事になつたのである。身體が病氣でありますから尚更以て都へ上るなど、云ふことは出来なくなつた譯である。

山樓粉堞隱悲筋。さう云ふ譯で檢校工部員外郎と云ふ役をは持つて居り乍ら病氣で都へ歸ることが出来ずして、矢張り此夔府あたりの山樓の間に身を寄せて居ることであつて、物悲しい筋聲を獨りて此處で聞くより仕方が無い様になつた。今日が暮れたかと思ふ中に早や今まで石上に掛つて居つた藤蘿に月の光が映じて來て居る。

其上又遠く前の洲を照らすので、其洲の處には蘆荻の花が在るであらう其邊へ月の光が及んで居るのを見る、と此處は景色で結末と致したのであります。

⑩ 「秋興八首」其三

千家山郭靜朝暉。一日江樓坐翠微。信宿漁人還泛泛。清秋燕子故飛飛。巨衡抗疏功名薄。劉向傳經心事違。同學少年多不賤。五陵衣馬自輕肥。

堀辰雄「杜甫訳詩」〈全文〉

III

千「家」戸ぐらゐの人家から成る山の城市に、

いま朝日が靜かに照つてゐる。

私はこの日々、その山腹の江樓に坐して、「もの思ひに耽つて」ぼんやりと眺めている。

ゆうべから漁をしてゐる「」のが見える。

燕の飛んでゐるのも見えるが、もう秋だのに、なんでまだ此處を立ち去らずに、ゐるのだらう。まるで私のいまの境涯を暗示でもしてゐるやうだ……

私はすべての事が心と違つて、いま、

森槐南「杜詩講義」〈摘録〉

千家山郭靜朝暉。夜が明けて見ると夔州の田舎にして千家位人家がございます。山の郭をなして居る其郭に向つて朝日が靜かに照り付けて参りますと、なかなか朝の景色は爽かで随分佳い景色でございます。

日々山水の明媚なる間に於て此江樓に坐して見て居ると實に佳い景色であります。所が、信宿漁人還泛泛と云ふのは昨夜より致して徹宵漁をして居りまして朝まで魚を捕つて居ります漁人、信宿は昨夜から夜を徹しましたこと、此信宿の漁人などは夜が明けても矢張り船を泛々然と動かして水中で漁をいたして居る。その泛々として何處にも繋がり處の無い様な處が、即ち己れの身の窮迫を致して居ります境涯其儘であると云つて宜いのであります。此燕子の巢を尋ねて飛ぶのを私に羨んで居ると云はなければならぬ。それが又故らに人間を嘲るが如く飛んで居る事であると云ふので、故という字が這入つて居ります。還と云ふ字には泛泛然たる己の身世も亦其通うと云ふやうな、己の身の落着ける處が無いから燕子まで我を嘲つて飛ぶと云ふ様な事である。

其漂泊の感に堪へられぬに付て胸に浮かぶことは、今日までやりました事は皆

こんな漂泊の身の上になつてゐる。若い時分の友達は、私と異なり、それぞれみんな出世して、「都で」いま「都」長安の「公園」繁華な町を輕衣をまとひ、肥えた馬に乗つて、毎日面白く遊び戯れてゐることだらう。

事、志と違ふて居りますので匡衡抗疏功名薄。已むを得ずして斯様な夔州に漂泊をする事になつたのである。左さばと言ふて自分の若い時分から學を同うした少年の友達なども無いでは無い。其學校友達で同時に卒業した人なども澤山ありますが、さう云ふ人を見ると多くは皆不賤と大分偉い者になつてござる。唯日々五陵と云ふ長安の近所に在ります公園見たやうな處に、極く輕い着物を被てさうして肥へたる馬に跨つて毎日面白く遊び戯れて御座るのみで、一向其友達は私が斯様に流落をして居ることを心配いたして呉れる者は一人も無い次第である。

堀辰雄「杜甫詠詩」〈全文〉

IV

いまの長安は、しかし聞くところによると、「昔の長安とは異つて」大變騒がしいやうだ。

森槐南「杜詩講義」〈摘録〉

長安の様子を予め承はると近頃の長安は昔我が居つた時の長安とは異なつて、偉い騒ぎであるさうだ。丸るで棋を打つて居る劫でも争ふやうな塩梅であるさうである。乱離起つてより以來、今日に至り、今日よりして又下、更に何年も大抵此の如し。此亂が平らぐであらうかどうか實に

かかる百年もに及「ぶ」ばんとする亂は、ほんとうに悲しみに堪えないことだ。

王侯の第宅はすべて新しい主人が入つてをり、文武の衣冠も昔とはすつかり異つてゐる「との事。」さうだ。

現に長安の北方ちかくには、金鼓の響きが天に冲つて聞こえてゐるし、又、西の方の吐蕃も時々寇するので、屢々、急使が立つてゐる。……さういふ噂を耳にしながら、私はこの秋の末ちかい江、——もう魚たちが「もう」驚んでしまつてひつそりとした冷や／＼な「江水のほとりに居つて、しきりに昔の平和だった長安のことを思ふてゐる」ばかりだ。

分からだぬのであります。それで百年世事と言ふのであります。長安は奕棋に似て實に亂麻の有様であると承はつて居る。實に悲哀の念に堪へない事である。

丸でどうも王侯の第宅が主人が變つて新しい人が這入つて居ると云ふことである。それから又文武の衣冠も昔玄宗皇帝の時分の禮服を着けて出ました有様と今日の有様とは大變に違つて居るので、今ではもう頓と海外の人の被る着物で無くては流行らない様な塩梅になつて來て居ると云ふ事である。

現に直北關山には金鼓の響が天に冲つて聞える事である。夫から又西の方の吐蕃の夷も時々侵犯をして參るから、是が爲に何處に吐蕃の兵が這入つたら直ぐ防がねばならぬと云ふので、火急の飛脚で救の兵を出すと云ふ事は毎日續いて居つた事である。

聞道と云ふ字が此處迄冠さつて居る。征西の車馬羽書馳すとは承つて居る。左様に承はつた我は今や魚龍寂寞秋江冷かなる此夔州の江上に居るのである。

而して昔我が長安に居つた時は天下太平の長安であつて今日承はる所の長安とは異つて居る。さう云ふ處から覺えず昔の長安が惚ける、と申す意味でござります。故國平居の平居は、太平の長安に居つた時の有様と云ふ事を申し上げます。

①「秋興八首」其四

聞道長安似奕棋。百年世事不勝悲。王侯第宅皆新主。文武衣冠異昔時。直北關山金鼓振。征西車馬羽書馳。<sup>13</sup>魚龍寂寞秋江冷。故國平居有所思。

⑫ 「秋興八首」其五

蓬萊宮闕對南山。承露金莖霄漢間。西望瑤池降王母。東來紫氣滿函關。雲移雉尾開宮扇。日繞龍鱗識聖顏。一臥滄江驚歲晚。幾回青瑣點朝班。

<p>堀辰雄「杜甫訳詩」〈全文〉</p>	<p>森槐南「杜詩講義」〈摘録〉</p>
<p>V</p> <p>その頃の長安はといへば、蓬萊山に來たかとおもふやうな立派な宮殿が、終南山に相對して、燦爛として居つた。</p> <p>承露盤といふ、恐ろしい高い仙人の形をしてゐる」た銅像が、空に聳えてゐた。立ち、</p> <p>西のかた、瑤池には西王母が下り給うたごとく、「ひ、又、東からは紫氣が棚引いてきて、函谷關に充ち満いてゐる」をつたことだ。——</p> <p>そんな「盛ん」壯麗な有様だつた。</p> <p>自分も、またちかちかと天子の龍顏</p>	<p>長安の宮闕即ち唐の宮殿は巍巍として聳えて居ります。宛然蓬萊山に來たかと思ふやうな立派な宮闕が遙かに終南山に相對して、金碧燦爛たる其側には承露の金莖と云ふ様に漢の武帝の時代の古物があります。承露盤と云ふのは恐ろしい高い仙人の形をなして居ります銅像、夫が空に聳えて居りますことである。</p> <p>西望瑤池降王母。其處へ時あつて天子が華池宮などへ行幸され、其温泉に楊貴妃などを御伴いになつたと申しますのは、王母を以て貴妃に擬へましたのであります。又、東來紫氣滿函關と云ふのは、是れ老子が西の方へ參ります時分に函谷關まで參ると、關所守が遙かに老子の來るのを待つて居つた。どう云ふ譯であつたかと云ふと紫の氣が老子の頭上に棚引いてそれが次第々々に東からやつて來たので、老子が此處に來たと云ふことを知つたと申すのであります。</p> <p>老子の紫の氣が函關に満ると言へば今の唐の社稷は大いに盛んで、函谷關は長安の入口でありますが其境までも紫氣が充滿ちて、非常に唐の帝王の氣象が盛んに見える。</p> <p>夫から又さう云ふ立派な帝王の氣象の日々に壯麗を極める時に方つて己も亦天</p>

に「咫尺」拜したことがあつた。

そのときは雉の尾でつくつた扇をひらいたやうに雲がおのづからひらいて、

太陽の光がさあつとさしてきたかのやうだつた。……

だが、いまはかゝる江のほとりに臥して、はや秋も暮れんとしてゐるのに驚いてゐる。

誰あつて、かゝる身が、昔、朝廷に列してゐた者であ「ちうと」ることを知つてゐるやうや。

子の龍顏に咫尺し致した事があつた。

雉尾扇を左右へずつと開くと雲が徐々に移り開いたかと思はれる様である。又恐る恐る聖顔をば拜し奉つた其時には、宛然太陽の光が龍鱗を繞つて五光が差して正視することが出来ぬかと思ふ心地が致すことであつた。

所が今は、魚龍寂寞秋江冷と申しました。そこが矢張り首腦であつて、一臥滄江驚歲晚。斯様に寂寞なる魚龍の潛む様な滄江に一度臥して今年も早や年の暮れて年が終らんとする迄になつた事である。さう云ふ身分である。安んぞ知らん此身は幾度も青瑣の前に行つて朝班を汚した所の人物である。が誰あつて今此滄江に臥して居る身體が曾て長安の青瑣闕の朝班に點じた者であると云ふ事は誰も知るまい。我ながら殆どそれは夢かと思ふ位であると斯う申す意味であります。



⑬ 「秋興八首」其六

瞿唐峡口曲江頭。萬里風煙接素秋。花萼夾城通御氣。芙蓉小苑入邊愁。朱簾繡柱圍黃鶴<sup>15</sup>。錦纜牙樁起白鷗。迴首可憐歌舞地。秦中自古帝王州。

堀辰雄「杜甫詠詩」〈全文〉	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉
<p>いまわが身のある瞿塘峡口にある私の身も「も、又、昔」の「ありし長安の曲江のほとりも、</p> <p>秋は「おなじである。」殆どかはらない。「萬里を」遠く所は隔ててゐるけれど……</p> <p>その曲江のほとりの花萼樓「には」や芙蓉苑では「兄弟」臣下のものを集められて御遊があつたが、いつか世が亂れだして、そのあたりまで邊地の愁が入りだした。</p> <p>昔は珠の簾や刺繡をした柱「を」の間</p>	<p>今日では瞿塘峡口の此身も又曲江頭の長安も、萬里風煙接素秋とどちらも今正に秋である。</p> <p>長安の秋と瞿塘峡口の秋と萬里を隔て、居りますけれども、風煙の秋の景色は少しも違つて居るまいと思はれるが、先づ長安の事で身は瞿塘峡口に在り乍ら曲江の秋を見るが如く胸中に想像が浮かぶ事である。</p> <p>花萼夾城通御氣。未だ盛んな時分に此曲江と申す處までは夾城と云ふ者がありまして、夾城は即ち復道の事でありませう。夾城の復道の真中に花萼樓と申す樓があつた。此樓は玄宗皇帝が御兄弟を澤山集めて樂しまれた樓であります。近臣の分け隔なき者は兄弟と同様に集められて天子の一體の手足であると申します。</p> <p>芙蓉苑と申す處が曲江にございます。此夾城の中を傳へて出ます其最後のどん尻が芙蓉苑であります。昔し芙蓉苑は日々御遊があつた事であつたが、其後祿山は叛旗を翻したことを御聞きになると同時に、其夾城の今まで盛んであつた御遊も段々止むことになつた。所謂邊愁なるものを養成して參つた譯である。</p> <p>此二句は何れも盛んな時の形容であつて、其盛んになる時の景象を衰へた處に</p>

を黃鶴が飛びかい、錦の纜や象牙の樁をした舟が水鳥を驚かせて飛び立たせてゐた。……それらの歌舞の地はいまは跡方もなく、「おもへば」可憐に堪へない。おもへば、長安は、漢の頃からの「帝」都であつたものを。

廻すのは外でない唯々可憐と云ふ二字で、昔歌舞の地であつた處には珠簾繡柱圍黃鶴、錦纜牙樁起白鷗であつたが、今日ももう跡方も無い様になつて仕舞つて居る事である。實に首を廻して可憐の意に堪へぬ。

元來長安と云ふ處は唐の都ばかりでは無い、漢の時代より都になつて居りました處で、其盛んなる時は其土地で歌舞をして後聯に申す如き御遊を極められた。それが何うして斯んなに俄かに變じたものかと長安の變り果てたる方から首を廻らして考へると、實に唯々可憐に堪へない譯であると斯う申す意味であります。

⑭ 「秋興八首」其七

昆明池水漢時功。武帝旌旗在眼中。織女機絲虛夜月。石鯨鱗甲動秋風。波漂菰米沈雲黑。露冷蓮房墜粉紅。關塞極天唯鳥道。江湖滿地一漁翁。

堀辰雄「杜甫詠詩」〈全文〉	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉
<p>「昆明」いまも残つてゐる昆明池は、漢の頃の事業で、いまなほ武帝の旌旗が目に見えるやうだ。</p> <p>その「兩」岸に立つてゐる「石像の」織女「は」の石像は、月光をあびて空しく「立ち」、機を織つてをり、</p>	<p>其昆明池水は漢代の一の事業として成功した事業で今に至つて傳へられて居るから、武帝の旌旗は今でも尚眼に見える様である。此武帝は漢の武帝を申しますけれども武帝の旌旗が眼中に在る譯はありませぬから、玄宗皇帝の旌旗が眼に見える様だと斯様に申すに過ぎませぬ。</p> <p>織女の機糸の残つて居る其機石は残つて居るけれども、空しく夜月が之に向つて居るので實際昔の織女の機糸では無いの</p>



石鯨もいまだに鱗甲が秋風に動いてゐるのみだ。

廢苑は荒れるがまま「に」で、まほ「や」の實が波間に漂ひ、  
 蓮「の實」も折れ折れになつてさまざま  
 じい有様だ。……

長安「が」はそんな有様に「なつて」なるし、自分は自分で、こんな鳥の通る道よりほかはないやうな蜀へ漂泊して、

いまはただ廣々とした江のうへのたつた一人の漁翁のやうに、ぼつねんとしてゐる……。

長安は右の如くであつて扱ま自分は萬里風煙の遠く隔たつた此關塞極天惟鳥の通ふ道より他は無いと云ふやうな蜀へ漂泊して、今では唯々江湖滿地到る處に泛々として繋がる舟の如く流浪を致すのである。のみならず、其衰へた長安を是から行つて見ると云ふ事も出来ない境遇に居るが誠に詰まらぬ譯ではあるまいか、と斯う申すのであります。

15 「秋興八首」其八

昆吾御宿自逶迤。紫閣峰陰入漢陂。香稻啄餘鸚鵡粒。碧梧棲老鳳皇枝。佳人拾翠春相問。仙侶同舟晚更移。綵筆昔曾干氣象。白頭吟望苦低垂。

堀辰雄「杜甫詠詩」〈全文〉	森槐南「杜詩講義」〈摘録〉
VIII	昆吾御宿と申しますのは長安の山の終南山、京都の比叡山と云ふ様な山の其山脈が分かれて居ります、其山の小名を申し

長安の近くには大小の山々が「迂回し」とりまいてゐて、  
 そのなかの紫閣峰が漢陂の水に倒まに影を落としてゐるところなどは、いかにも景色の佳いところだつた。そのあたりに鸚鵡が澤山棲んでゐて、ときどき稲の粒を啄みに來たり、立派な梧桐の木が生えてゐて、その枝のうへにはいかにも鳳凰でも棲まつてゐさうだつた……

私も昔は佳人を携へて草摘みにいつたこともあり、  
 又、仙人や僧侶と舟「を同」に乗つて日の暮まで遊んだことがある。  
 さういふ遊樂の様を五色の光彩ある筆を揮つて立派な文章を作つて天子の一顧を蒙ることも出来るであらうとおもつてをつたのに、  
 その自分はいまは「已」老いて、氣衰へ、この江のほとりに徒らに首を低れて「ばかりだ」をゐるのみだ。

即ち此紫閣峰陰漢陂あたりでは鸚鵡などが始終棲んで居る。其鸚鵡が時々來て香稻の粒をば啄みに飛んで來る事があるのである。  
 それから又此邊には地味が良いので梧桐の大きな木が生へる。宛然其枝の上には鳳凰を棲ましむることが出来るであらうと思ふ様な立派な碧梧の木が在るのであります。  
 所が我嘗て佳人を携へて紫閣峰へ草摘に出かけて充分遊んだこともある。  
 又或時は仙侶と舟を同じうして漢陂に泛んで日の晩までも遠く乗り出したこともあった。  
 さう云ふ面白い遊びをして五色の光彩のある所の筆を揮つて、此筆で以て天の氣象をも干したの星宿をも動かす、即ち天子の御意をも引き得て立派に文章の才藝を以て天子の一顧を蒙ることが出来るであらうと迄思ふた事であつたが、其人が今日は白頭吟望して徒らに首を低れて、此魚龍寂寞たる滄江に一臥して年の暮るゝに驚くと云ふに至つては、實に何とももう悲哀の極でありまして、此は口にも筆にも述べる事が出来ない位に感じられることであると斯う申しますのであります。

この堀辰雄「杜甫訳詩」・森槐南「杜詩講義」対照表を見ると、堀辰雄が森の『杜詩講義』から「引き写した」箇所極めて多いことがわかる。内山知也氏は「堀辰雄 杜甫ノート」『解説』において「堀辰雄の使用したテキストは、今のところ明らかでない」(前掲)と述べるが、より正確には「堀辰雄は主に森槐南『杜詩講義』に依り、多くの場合、『杜詩講義』中の訳文を引き写しながら杜甫訳詩を為した」と言うべきであろう。

## 三

森槐南『杜詩講義』はその名の通り、森槐南(名は泰二郎、一八六三—一九一一)の杜甫詩講義録であり、明治四十五年(一九一二)、すなわち槐南が没した翌年の二月から大正元年十一月にかけて上中下の三巻が東京の文會堂書店より刊行された。同書の「例言」(三谷仲の執筆)によると、森槐南は「清」沈徳潜『杜詩偶評』をテキストに杜甫詩の講義を行い、それは二十七、八歳の頃より始まったという。そして、この槐南による杜甫詩講述には荒浪煙崖の速記録がのこされており、その速記録をもとに三谷仲をはじめとする門人たちが浄書・出版した、という経緯を持つ。

第一節で多恵子夫人の回想を引用したが、そこにあるように堀は昭和十七年の夏、軽井沢から福永武彦に『杜詩講義』の購入と送付を依頼していた。堀は福永より送られたこの『杜詩講義』から杜甫詩十五首を選び、多くの場合、同書中の訳文をノートにそ

のまま引き写した——それがこの「杜甫訳詩」(筑摩『全集』の「支那古詩(二二)」なのである。

本節では以下に、(1) 杜甫詩原文、(2) 堀辰雄の選詩理由、(3) 「秋興八首」全首翻訳、の三つの問題を設定し、堀辰雄の「杜甫訳詩」についてさらなる検討を加えたい。

## (一) 杜甫詩原文

堀辰雄は『杜詩錢注』『杜詩鏡銓』という、中国で刊行された杜甫詩の注釈書、いわば「原書」を所蔵していたが、「杜甫訳詩」をなすにあたって用いた杜甫詩原文は『杜詩錢注』『杜詩鏡銓』ではなく、森槐南『杜詩講義』所載のそれであることは疑いを容れない。このことは、以下に示す二例から明らかである。

- ① 「野老」第四句「估客船隨返照來」の「估」字は『杜詩錢注』『杜詩鏡銓』ともに「賈」字に作る。森の『杜詩講義』では詩原文も、テキストとした沈徳潜『杜詩偶評』(巻四)が「估」字に作るのに従うばかりか、訳文も「估客の船」となっている。堀の「杜甫訳詩」でも『杜詩錢注』『杜詩鏡銓』に従うことなく、『杜詩講義』の訳文を引き写して「估客の船」となっている。

- ② 「秋興八首」其二第二句「每依北斗望京華」の「北斗」を『杜詩錢注』は「南斗」に作る。その一方、堀の杜甫訳詩で

は「北斗星」となっている。これは森の『杜詩講義』が詩原文で「北斗」に作り、訳文でも「北斗星」とあることに従った結果である。

この二例以外でも、第二節において注記した、『杜詩講義』（＝沈德潛『杜詩偶評』）と、『杜詩錢注』および『杜詩鏡銓』とのあいだの文字の異同を見ても、堀辰雄は前者のみを参考としたと判断される。その中で特に注意すべきは⑨で、杜甫詩本文が「南斗」に作るか「北斗」に作るかは、解釈上の大きな問題であり、堀の『杜甫訳詩』が森の『杜詩講義』を引き写して「北斗星」としていることは、堀が『杜詩錢注』をほとんど参考にしていなかった事実を示しているよう。

ただ、例外として注目すべきは、②「南隣」第五句「秋水纔添四五尺」の「添」字である。沈德潛『杜詩偶評』も森の『杜詩講義』も「添」に作るのに対し、堀は第五句を「秋のことだから水[嵩]がわづか四五尺くらゐ[の深さ]しかない」（傍点引用者）と訳している。この「添」字については、『杜詩錢注』『杜詩鏡銓』はともに「深」に作っているので、一見すれば堀はこの二書に依って「深さ」と訳したものと考えられるが、森の『杜詩講義』に「此添と云う字は一本に深となつて居るのがあります。義の上から申すと深いとした方が宜い様でございます」と明確に述べられているので、やはり堀は『杜詩講義』に従ったと考えるべきであろう。

う。

## (二) 堀辰雄の選詩理由

堀辰雄が参考にした森槐南『杜詩講義』、および『杜詩講義』の底本となった沈德潛『杜詩偶評』には三百篇以上の杜甫詩が収録される<sup>18</sup>。では、堀辰雄はどのような基準で『杜詩講義』のなかから十五首を選んだのだろうか。

堀の「杜甫訳詩」十五首は、原詩の制作時期から見て、①～⑦の「成都期」と⑧～⑮（「秋興八首」）の「夔州期」の二群に分けることができる。唐・天宝十四載（七五五）に安祿山の乱が勃発したのち、杜甫は反乱軍占領下の長安を脱出し、肅宗のもとに駆けつけた功績を評価されて左拾遺を授けられるが、やがて肅宗に疎まれ、乾元元年（七五八）には地方の小官に左遷される。翌年にはその官職を捨て家族を連れて秦州（現在の甘肅省天水市）へと移住する。その後、蜀（現在の四川省）の成都へと居を移し、上元元年（七六〇）には成都の郊外、浣花溪に住居（いわゆる「浣花草堂」「杜甫草堂」）を築く。永泰元年（七六五）成都を離れるまでの約六年間、蜀で反乱が起きて成都から離れた時期を除けば、杜甫は成都の「浣花草堂」にて安定した平穏な生活を送ることができた。それは、旧知の嚴武が西川節度使・成都尹として成都に在り、嚴武の庇護を受けたことが大きかった。①～⑦の詩はすべてこの「成都期」の「浣花草堂」での作であり、特に①～⑥の五

首は安定した環境のもと、時には望郷の念に駆られ、時には古い  
の自覚に苛まれながらも、山川草木をいとおしみ自適の生活を楽  
しむ内容となつてゐる。また、⑦「茅屋秋風の爲に破らるるの歌」  
は、その詩題が示すとおり、秋の暴風雨によって住居が損壊する  
という内容であるが、その一方で詩中ではほほえましい家族生活  
も表現され、結末部では自己犠牲的でヒューマニスティックな表  
現が提示される。

内山知也『堀辰雄 杜甫ノオト』によると、堀が杜甫訳詩に取  
り組んだのは昭和十八・九年（一九四三―四四）であるといふ。  
かねてより病氣療養のため軽井沢に長期滞在することの多かつた  
堀であるが、昭和十八年は七月から十一月まで夫人とともに同地  
に滞在、昭和十九年は一月に疎開のための家を探すために軽井沢  
に行き、一旦帰京して咯血、六月には軽井沢での生活を始めるの  
まま同地に滞在して翌年の日本敗戦を迎えることとなる。堀の「杜  
甫訳詩」は、出生の地でもある東京を離れた軽井沢にてなされた  
と言える。戦火を逃れて軽井沢に至り、また病氣療養中でもあつ  
た堀にとつて、自然を愛で穏やかな生活を享受する、成都期の杜  
甫の詩はいずれも心惹かれる作品群であつたにちがいない。

⑧～⑮「秋興八首」の「夔州期」については、(3)「秋興八首」  
全首翻訳の問題と関わるので、以下に述べる。

### (三) 「秋興八首」全首翻訳

永泰元年（七六五）五月、杜甫は成都を離れ長江を下つて雲安  
（現在の重慶市東部）に至る。永泰二年（十一月には改元して大曆  
元年、七六六）には夔州（現在の重慶市奉節）に至りこの地に居  
を構える。⑧～⑮「秋興八首」はこの年の秋の作と考えられる。

『杜詩講義』に見られる三百篇以上の杜甫詩のなから、堀辰雄  
はなぜ、この夔州期の「秋興八首」を選び、しかも全首を日本語  
に翻訳したのであろうか。この問題について、内山知也氏は『堀  
辰雄 杜甫ノオト』「解説」の「あとがき」に以下のように述べ  
る。

成都における生活に破綻を来した杜甫は、長江を下つてい  
く。そして、二年ほど長江北岸の山峡の町夔州に農耕生活を  
送る。彼は病気がちであり、滞在の末期には左耳を患つて聴  
覚を失つた。旅の途中であるという観念と酷しい自然の中で  
の生活のために、杜甫は一種の悲壮感にさいなまれた。その  
心情を表す詩が、この「秋興八首」である。杜甫の嗟嘆は、  
同時に当時の堀辰雄の嘆息ではなかつたかと思われるふしが  
多いことを、読者の皆さんも感じ取られることだろう。

成都期であれ、夔州期であれ、両時期の杜甫詩が堀辰雄をして自  
己を投影させるに足る作品群であつたことは疑いを得ないが、⑧

⑮「秋興八首」については、もう一つ別の理由があることを本稿では指摘したい。

堀辰雄には二種類の杜甫訳詩——筑摩書房『堀辰雄全集』第七卷(下)収録の「支那古詩(二)」と「杜甫訳詩」——があり、後者「杜甫訳詩」が、中国古典詩歌のドイツ語訳である、Hans Bethgeの *Physichblüten aus China* (一九二二)からの翻訳であることは第一節において既に指摘した通りである。*Physichblüten aus China* には、杜甫「秋興八首」から四首が取られてドイツ語訳されており、堀はその四首すべてを日本語に翻訳しているのである(下表参照)。

堀辰雄は、*Physichblüten aus China* のドイツ語訳がもとはどの唐詩人のどの詩篇であるのか、原詩を特定し同書中に朱筆にて書き込みをしているのであるが、この四首については原詩を特定できないまま、ノートに日本語訳を記しているのである。すなわち、「杜甫

Hans Bethge: <i>Pfirsichblüten aus China</i>			堀辰雄 「杜甫訳詩」	原詩
	詩人名	詩題		
(16) <sup>(19)</sup>	Thu-Fu	Herbst in der Fremde	[14] <sup>(20)</sup> 異郷の愁	⑧ <sup>(21)</sup> 杜甫「秋興八首」其一 「玉露凋傷楓樹林」
(17)	Thu-Fu	Schmerzliche Erinnerung	[12] 痛しき追憶	⑮ 杜甫「秋興八首」其八 「昆吾御宿自逶迤」
(19)	Thu-Fu	Biage	[10] 歎き	⑩ 杜甫「秋興八首」其三 「千家山郭静朝暉」
(20)	Thu-Fu	Herbst	[11] 秋	⑬ 杜甫「秋興八首」其六 「瞿唐峡口曲江頭」

訳詩」の「[14]「異郷の愁」・[12]痛しき追憶・[10]「歎き」・[11]「秋」である。

Bethge による杜甫詩四首のドイツ語訳を日本語に訳しながら、その原詩が特定できなかったことに、堀辰雄はさらなる興味、あるいは深い悔恨を抱いたにちがいない。のちに、森槐南「杜詩講義」・錢謙益『杜詩錢注』・楊倫『杜詩鏡銓』などの杜甫詩の注釈書を参照することによって、これら「秋」や「追憶」を主題とする杜甫詩四首が「秋興八首」であることに気づき、改めて八首全首を主に森槐南『杜詩講義』を参考に日本語に翻訳したのが、本稿で検討の対象としている「杜甫訳詩」——筑摩『全集』の「支那古詩(二)」——の⑧⑮だと考えられる。

#### 四

大修館書店発行の高等学校国語科用教科書(文部科学省検定済み教科書)『新編 古典B』は、杜甫「秋興八首」其一を採録し、さらに(参考)として「杜甫詩ノート」堀辰雄」を付録する。すなわち、堀辰雄の訳文(本稿⑧)が国語教科書に掲載されているのである。これは、中国の古典詩(漢詩)が堀辰雄という二十世紀の文学者にも注目され、しかも「比較的柔らかな口語の散文体」で翻訳されていることが、日本の高校生が古典を学ぶ際に一助となる、と同教科書編集委員が判断したものと推測される。「口語体による翻訳」という新しい文学的試み、と高く位置づけられている



る感が否めない。

しかしながら、堀辰雄の「杜甫訳詩」——筑摩『全集』の「支那古詩(二)」——は、本稿の検討によって森槐南の『杜詩講義』の訳文をそのまま引き写している部分が極めて多いことが明らかとなった。堀の翻訳の文体が「比較的柔らかな口語の散文体」であるのは、内山知也『堀辰雄 杜甫ノート』で高く評価されているが、堀が多くを引き写した森槐南『杜詩講義』が槐南の講述(口述)の速記録をもとに作られているのであるから自動的にそのような文体になったのであり、決して堀の発明・工夫だけによるものではない。

むしろ、堀辰雄の「杜甫訳詩」は未定稿の未発表原稿であるから、これを森槐南『杜詩講義』からの盗用・剽窃と非難することはできない。ただ、今回の検討で明らかとなった事実は、堀辰雄と同時代の文学者、井伏鱒二(一八九八—一九九三)の『厄除け詩集』『訳詩』を想起させる。井伏鱒二は昭和八年(一九三三)『文学界』十月号に随筆「田園記」を発表する。「田園記」には、「明」李攀龍「選」とされる『唐詩選』から、賀知章「題袁氏別業」・張九齡「照鏡見白髮」・孟浩然「送朱大入秦」・孟浩然「春曉」・儲光羲「洛陽道獻呂四郎中」・儲光羲「長安道」・杜甫「復愁」・錢起「逢俠者」・韋応物「答李濟」・韋応物「聞雁」の五言絶句十首を選び、これらを七七五を基調とした軽快なリズムと、くだけた日常語的近世語によって翻訳したものが収められている。「田園記」

には訳詩の前に以下のように記される。

私は亡父の本棚のなかをかきまはして和綴ぢのノートブックをとり出し、かねがね私の愛誦していた漢詩が翻譯してあるのを発見した。それは誰が翻譯したのか訳者の名前は書いていないが、ノートブックにこまかい字で訳文だけが記されていた。きっと父が参考書から抜き書きしたのであらうと思はれる。漢籍に心得のある人には今更ら珍しくもない翻譯であるかもしれない。私は自分の参考にもなるだろうと思ふのでここにすこしばかりそれを抜萃してその原文をも書いてみよう。

井伏は続けて昭和十年「作品」三月号に随筆「中島健蔵に」を発表し、李白「静夜思」・高適「田家春望」・韋応物「秋夜寄丘二十員外」・司空曙「別廬秦卿」・于武陵「勸酒」・孟郊「古別離」・柳宗元「登柳州峨山」の五言絶句七首の翻譯を載せた。併せて十七首の唐詩の翻譯は、昭和十二年五月に野田書房より出版された『厄除け詩集』に「訳詩」として収録された。このなかで于武陵「勸酒」の結句「人生足別離」を「サヨナラ」ダケガ人生ダ」と訳したことがとりわけ有名である。

『厄除け詩集』『訳詩』については、特に「田園記」所収の賀知章「題袁氏別業」以下の十首の翻譯が、潜魚庵(江戸時代美濃派



の俳人、中島魚坊、一七二五—一七九三)「訳」「唐詩選和訓」(あるいは『唐詩五絶白挽歌』)からの引き写しに過ぎないことが明らかとなっている。

井伏の場合は、『厄除け詩集』出版の際に、初出の「田園記」にはあった、「亡父の」「ノートブック」に「記された」「訳文」を抜萃し<sup>23)</sup>たとの注意書きが無いために、これら唐詩の翻訳のすべてが井伏の訳文であると理解され、これでは盗用・剽窃の譏りを免れない。

これに対し、堀辰雄の「杜甫訳詩」は未定稿の未発表原稿であり、しかもその訳文は井伏のように全文を一字一句違わず引き写しているわけではない。しかしながら、森槐南の『杜詩講義』からの引き写しが非常に多い以上、「杜甫訳詩」はあくまで「堀辰雄が杜詩理解のために作成したノート・メモ」として位置づけるべきではなからうか。

### 注

- (1) <http://www.townkaruzawa.jp/www/contents/1001000000947/sample/kad.pdf>
- (2) 森槐南(泰二郎)『杜詩講義』(文會堂書店、一九二二年)に依る。適宜、森槐南「著」・松岡秀明「校訂」『杜詩講義』(東洋文庫、平凡社、一九九三年)を参照した。
- (3) 「估」を『杜詩錢注』(卷十二)・『杜詩鏡銓』(卷七)ともに「賈」に作る。
- (4) 「茅栗」を『杜詩錢注』(卷十一)は「芋栗」に、『杜詩鏡銓』(卷七)

堀辰雄の杜甫訳詩について(承前)

- (5) 「未」を『杜詩錢注』(卷十二)は「不」に作る。
- (6) 「添」を『杜詩錢注』(卷十二)・『杜詩鏡銓』(卷七)はともに「深」に作る。

- (7) 「送」を『杜詩錢注』(卷十二)は「對」に作る。
- (8) 「床頭」を『杜詩錢注』(卷四)は「床床」に、『杜詩鏡銓』(卷八)は「牀牀」に作る。
- (9) 「北」を『杜詩錢注』(卷十五)は「南」に作る。
- (10) 「榷」を『杜詩錢注』(卷十五)は「查」に作る。
- (11) 「日日」を『杜詩錢注』(卷十五)は「一日」に作る。
- (12) 「泛泛」を『杜詩錢注』(卷十五)は「汎汎」に作る。
- (13) 「馳」を『杜詩錢注』(卷十五)は「遲」に作る。
- (14) 「點」を『杜詩錢注』(卷十五)は「照」に作る。
- (15) 「鶴」を『杜詩錢注』(卷十五)は「鶴」に作る。
- (16) 「月夜」を『杜詩錢注』(卷十五)は「夜月」に作る。
- (17) 「曾」を『杜詩錢注』(卷十五)は「遊」に作る。
- (18) 『杜詩偶評』には三百四十九首、『杜詩講義』には三百二十二首。
- (19) (16)(17)(19)(20)は、長谷部剛「ドイツ語のなかの杜甫——堀辰雄の「杜甫訳詩」とのかわりを中心に——」(関西大学東西学術研究所紀要 第48輯、二〇一五年四月)における整理番号。
- (20) 「[14][12][10][11]」は、注19所掲論文「ドイツ語のなかの杜甫」における整理番号。
- (21) ⑧⑩⑫は本稿における整理番号。
- (22) 内山知也『堀辰雄 杜甫ノート』「解説」の「あとがき」。
- (23) 土屋泰男「井伏鱒二『厄除け詩集』の「訳詩」について」(『漢文教室』第一七七号、大修館書店、一九九四年二月)。および、寺横武夫「井伏鱒二と『白挽歌』」(『国文学 解釈と鑑賞』第59巻6号、至文堂、一九九四年六月)。

# On the Japanese Translation of Tu Fu's poems by Hori Tatsuo

HASEBE Tsuyoshi

There are two Japanese translations of Tufu's Poems by HORI Tatsuo (1904-1953). One was rendered from a German translation of Tufu's Poems by Hans Bethlehem (1876-1946). As for the other translation, this paper concludes that it is difficult to accept it as HORI's own work since it is clearly a copy of MORI Kainan's (1863-1911) interpretation of Tufu's Poems.

キーワード：杜甫 (Tu Du)、堀辰雄 (Hori Tatsuo)、森槐南 (Mori Kainan)、翻訳 (Translation)、比較文学 (Comparative Literature)